

# 丸山正義先生のご定年によせて

林 雄 介

丸山正義先生のご退職にともない、贈る言葉を書かせていただくことになった。とは言っても、涙ぐみつつ惜しみつつお送りするという雰囲気ではない。我々の仲間内では年に何回か集まりがあって、今後も先生がその場にお見えになるであろうことはほぼ確実だからである。また、一般的にこの種の文章は、その先生の研究業績を研究史に位置づけて記録に残すのを主眼とするものなのであろうが、私は先生のご専門であるフランス文学には全くと言ってよいほど縁が無い。失礼ながら、先生の研究を拝読したこともない。したがって、その任には堪え得ない。先生のご研究に接したい読者諸氏におかれては、この頁の前に載っているはずの研究業績に直接あたっていただくしかないことを初めにお詫びしておく。

では、どうしてそんな私がこの文を書くことを許されたのかと言えば、それはひとえに「青梅時代からの付き合いだから」の一点に尽きる。したがって、ここでは先生に向かって何か贈る言葉を捧げるというよりは、先生の人となりをお場に記すことで責を塞ぎたいと思う。

先生と初めてお会いしたのは私が青梅に赴任した1999年のことである。ずっと一緒にいたので先生は昔と少しも変わっていないように思ってきたが、冷静に計算してみると、あの時の先生は今の私よりも若かったことになる。少なからず衝撃的である。髪こそかなり白くはなれたが、皆さんご存知のあの雰囲気は当時すでに出来上がっていた。言い換えれば、良い意味で老成していた。今の私とは比較にならない。人生経験が豊富な故であろうかとも思うが、その点については後段で述べることにする。

先生のご専門はフランス文学だが、絵画や音楽にも造詣が深く、特に音楽は先生の生活のかなりの部分を占めていたように思う。明星フィルハーモニーの団員としてオーボエを吹いておられたし（後にチェロに転向）、青梅の先生の研究室は明星フィルの部室と化していた。というか、実際研究室のドアには「明星フィルハーモニー」の看板が掛かっていて、常に学生が入り出していた。一言で言えば、学生との距離が非常に近い教員であり、それは明星フィルの団員に限ったことではなかった。長く学生部長を務められたのも、そうした資質があってこそだったのだらうと思う。

先生は車通勤をしておられたが、一限に車で来るのはさすがにつらいので、一限がある日の前日は学校に泊まっておられた。割と良いベッドに電気毛布まで持ち込んでいて、下手なビジネスホテルより快適そうだった。当時、家が新潟にあるH先生も学校に泊まっていたが、やがて私も青梅の一限がある日は朝の労働力として使えないので「帰ってこなく

て良い」と言われ、晴れて「宿泊組」の一員となった。こうして家に帰らない教員が増えてくるなか、体育のK先生がミーティング用と称して大きなテーブルを買った（当時は個人研究費で什器が買えた）。こうして、いつからともなく、皆が泊まる日はK先生の部屋で飲み会が開かれるようになった。そんなある日、丸山先生が電気鍋を持ってきて「天ぷら揚げよう」と言い出した。早速買い出しに出かけ、天ぷらで大いに盛り上がった。あのときの天ぷらはことのほか美味で忘れがたい。もっとも、K先生の部屋はそれからしばらく揚げ油臭が消えずにK先生は難儀していたが、まあ、こんなことが許されていたのだから（許されていなかったかもしれない）良い時代である。

車通勤をしていることからわかるように、基本的に先生は車好きである。ただ、意外に思われるかも知れないが、その運転にはかなり問題があり、一度高速道路で車が転覆する事故を起こしたことがあるそうである。そのせいか、車は頑丈でなければならぬという思想を持っておられるようである。私は家が近いこともあって時々乗せていただくことがあるが、転覆ほどではないにせよ、「自分なら絶対やらないよな」と思わせるような運転には何度か遭遇している。贈る言葉は書かないと言ったが、「安全運転をお願いします」だけはこの際はっきりお伝えしておきたい。

最後に、丸山先生を語る上で外すことのできない奥様のことを書いておかねばならない。和服の似合う、上品でありながらよく笑う楽しい奥様で、上述の集まりにもいつも先生と一緒においでになる。奥様は先生の都立国立高校時代の音楽部の先輩で（そのためか今でも「丸山君」と呼ばれているとかいないとか）、長く某女子中高で地理の教員をなさっていた。丸山先生は高校卒業後、希望の大学への入学が果たせずにいたが、そのうち学生闘争のあおりで大学入試が実施されない事態となり、すでに高校時代からフランス語を勉強し、ランボーの詩などにも親しんでおられた先生は、日本の大学への進学に意欲を失い、22歳でパリのCours de civilisation française de la Sorbonne（ソルボンヌに入学する留学生の為の語学教室）に一年半ほど留学されたものの、（遊び呆けていたので：本人談）今の奥様から帰国命令が下り、帰国後すぐに結婚なさった。奥様の許可を得て慶応大学に入学したのは26歳の時で、入学式には奥様が和服に日本髪で同行され、「芸者を連れて入学式に来た奴がいる」と噂になったそうである。かなり年下になる女子の同級生からは既婚者ということで冷たい視線を浴びせられたそうだが、それに堪えつつ勉学に励み、博士課程まで終えられたが、大学院を出てもご多分に洩れず就職はなく、結局結婚してから1992年に青梅キャンパス開校と同時に明星に就職するまでの20年余り、奥様が先生を支え続けておられたことになる。ご本人曰く「ヒモの達人」だそうである。現在はその状況は脱しておられるわけだが、一度こんなことを目撃した。ある日、急な飲み会があって、先生が奥様にその旨メールを打つと、すぐさま「私は一人で夕食を食べるのですね」という短い返事が返ってきた。それを見た先生は、「俺、帰るわ」と、そそくさと席を立たれたのであった。ただ、いわゆる恐妻家というのではなく、年長者に向かって失礼ではあるが「微笑ましい」としか形容のしようのないお姿であった。周囲の皆から愛される所以である。

丸山先生。長い間お疲れ様でした。これからは奥様と過ごす時間が増えることになりませんが、今までと変わらず「微笑ましく」お過ごしください。学校に残る我々は、先生が貫かれた「学生ファースト」の精神を受け継いで参ります。また飲み会でお会いしましょう。